

## あきらめなかつた仙右衛門

### 小野仙右衛門

小野仙右衛門は、江戸時代の日州倉岡にっしゅうくわらおかに生まれ、各地の川の修復や井戸掘りなど、新田開発を得意とする薩摩藩士でした。ある日、二代藩主島津光久しまづみつひさからその功績を称えられて五十石こくを贈られたところ、「当たり前前の仕事をしただけで、私には何ら功績はありません。」と、五十石を返上してしまったという、彼の人となりを表す逸話いっわが残っています。

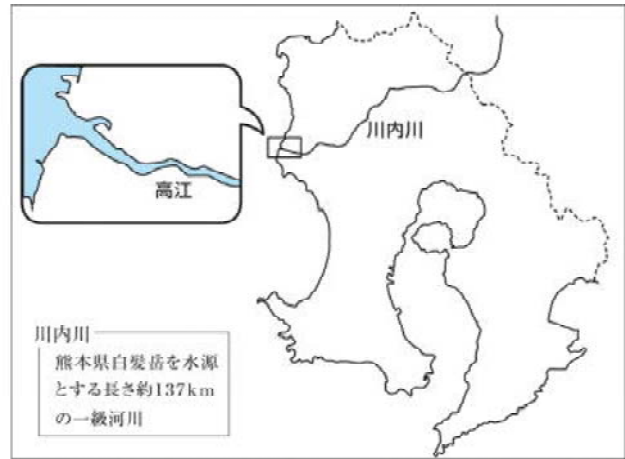
その後も仙右衛門は、光久から「これから先もたくさん  
の新田を開拓するように」という御沙汰書おさたしよをもらい、  
生涯しょうがいにわたって八千石の新田開発に従事しました。

その中の一つである、江戸時代初めの頃の、高江たかえ（現

現在の宮崎県宮崎市。当時は薩摩藩。

【石】  
体積を表す単位。一石は、人が一年間で食べるおよその米の量で、約一八〇リットル。

【御沙汰書】  
指示書、命令書。



在の薩摩川内市高江）での話です。

高江は、周囲が四キロメートルもある広い沼地で、干潮時は干潟となり、満潮時は川舟が通るほどの水の深さになりました。人々は、この沼地の一部を水田として整備し、稲作を行っていましたが、川内川の流域に位置するこの土地は、大雨が降るたびに堤防が壊れ、流れ込む泥水や海水で、米が一粒も穫れなくなるほどの大きな被害に遭っていました。

「高江三千石 火の地獄」と言われるような、非常に苦しい生活を送っていた高江の人々は、崩れた所へ土や石を盛ってしのいでいましたが、長年、薩摩藩にも堤防の改良を願い出ていたこともあり、ついに藩が動きましました。当時、新田開発に力を入れていた薩摩藩は、干潟と

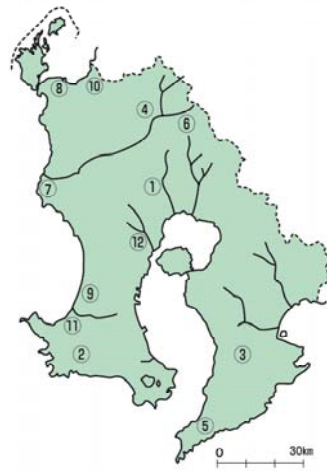
なっている高江に堤防を築き、三百町歩に及ぶ大新田

【干潟】

潮が引いて遠浅になった海岸。

【三百町歩】

約三平方キロメートル。



つそぬきずい道(一六六三年)  
 きよみずのいで  
 清水篠井手用水(一六六三年)  
 ありさと  
 有里用水(一六六四年)  
 むろやそすい  
 室屋疎水(一六六六年)  
 かわきた  
 川北新田(一六六六年)  
 ゆのお  
 湯之尾せき(一六八〇年)  
 えうち  
 高江新田(長崎堤防)  
 あた  
 江内干拓(一七〇〇年)  
 あた  
 阿多新田(一七二七年)  
 ごまんくみぞ  
 五万石溝(一七四四年)  
 かせだ  
 加世田用水(一七六六年)  
 いしいで  
 石井手用水(一八三三年)

を作ることにしたのです。

一六七九年(延宝七年)、光久の命により、堤防建設の責任者として、仙右衛門が普請奉行に任命されました。この時すでに仙右衛門は六十一歳でしたが、高江の厳しい現状を聞き、即座にこの仕事を引き受けています。

工事には、村人達だけではなく、藩内の平佐・隈之城・樋脇・東郷・水引などから数千人が徴集され、作業にあたりました。高江に着いた仙右衛門は、まず、干潟に水が入らないように石垣を作り、川内川の水をせき止めるように命じます。杭を打ち石を積み上げる手作業は、川内川の流れがある上に、川底の地盤が弱いいため、簡単ではありません。それでも人々は、洪水で悩まされてきた高江の暮らしを良くするには、仙右衛門が来てくれた今しかないと思い、苦しい気持ちを押しさえて、鍬やもつこで黙々と堤防を作っていました。



【もつこ】  
 棒を使って二人でかつぎ、物を運ぶ道具。

【普請奉行】  
 土木工事や建築を担当する責任者。



しかし、工事は思うように進みません。あと一步で完成というところまでは行くのですが、梅雨時の長雨や台風による洪水などで、せっかく築いた堤防は跡形あとかたもなく崩れ去ってしまうのです。このような繰り返しで、工事を始めて数年経っても堤防は築けず、工事の費用や材料もどんどんとほ乏しくなっていきました。また、病気で倒れる人や怪我けがをする人など、多くの犠牲者ぎせいが出て、工事に携たずさわる人々の数も、だんだんと少なくなっていきました。

五年が過ぎ、六年が過ぎ、今まで数々の難工事を成功させてきた仙右衛門も、なかなか堤防が完成しないことへの責任と不安をひしひしと感じていました。自らの命を絶って責任を取ろうかとも思いましたが、今工事をやめてしまえば、この高江の地は、また洪水に苦しむ干潟に逆戻りして、永久に救われません。高江の人々の気持

【考えてみよう】

みなさんの経験の中で、自然の力の大きさを感じたことはないだろうか。



「心 此念き塘成就」と読む  
説もある。

ちを考えると、この工事から逃げ出すことは、仙右衛門にはできませんでした。

工事開始から七年の月日が過ぎた一六八六年（貞享<sup>じゅうちょう</sup>三年）、仙右衛門は、崖<sup>がけ</sup>の岩壁に、工事を絶対に完成させるのだという強い意志を込めて、次のような文字を刻みました。

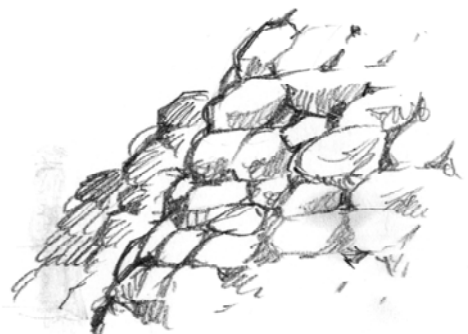
心 此為き塘成就

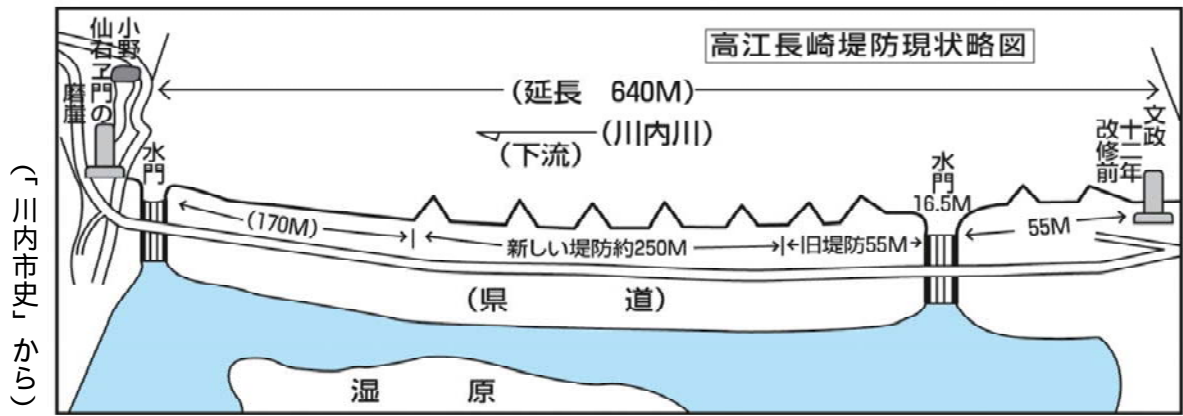
四月下旬

「この堤防が完成することを祈る。」という意味です。

この仙右衛門の思いと文字が刻まれた岩は、今でも川内のほとりに残されています。

そして、とうとう工事開始から八年目の一六八七年（貞享四年）、三つの水門を備えた、長さ六四〇メートルの





立派な堤防が完成しました。仙右衛門は六十九歳になつていました。彼の決してあきらめない強い心が、堤防の完成を導いたのです。この工事は、有名な薩摩藩の木曾川治水工事の、約七十年ほど前の出来事でした。

さて、特筆すべきは、この堤防の形です。まるで、のこぎりの歯が七つ並んだような形をしています。のこぎり状の堤防の形は、水の勢いを弱めるための工夫で全国でも珍しく、その設計の素晴らしさについて、現在も専門家から高い評価を受けています。

仙右衛門は、八年もの年月をかけて川内川の水の流れを見極め、この高江の地においては、のこぎりの形状の堤防が最も有効であることを導き出したのでしよう。

石材は、長さ一メートル、縦横四〜五センチメートルの大きさのものを使用し、その積み方も、表の方は

【考えてみよう】

この時まで仙右衛門を支えた思いとは、どのようなものだったのだろうか。

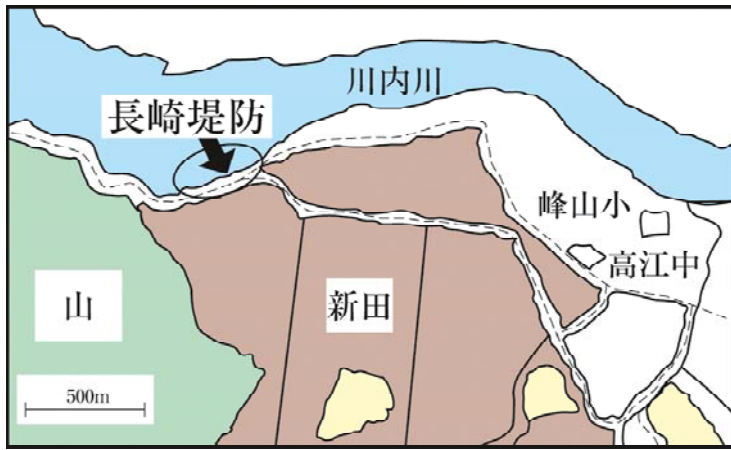
【木曾川治水工事】

一七五四年（宝暦四年）〜一七五五年（宝暦五年）。薩摩藩が、幕府の命を受けて行った、岐阜県の木曾川の治水工事。

薩摩藩は家老の平田鞠負を総奉行に任命し、およそ千人の薩摩藩士（薩摩義士）を派遣して、大がかりな治水工事を行った。

その後、多くの犠牲を払いながらも治水工事は完成に至ったが、平田は、多くの犠牲者が出た責任をとり、工事成後に自害した。

なお、この治水工事を機縁として、鹿児島県と岐阜県は一九七一年（昭和四十六年）に姉妹県盟約を締結しており、平成二十三年は、この盟約の四十周年に当たる。



【現在の高江新田】  
 新田の中に張り巡らされた用水路  
 や、近くを流れる川は、その後の工  
 事で整備されていった。

細く奥の方を太くというような、特殊な工夫が凝らされて  
 います。この堤防は「長崎堤防」と呼ばれ、その後、  
 数回にわたり補修工事が行われましたが、堤防の上流部  
 分の二つののこぎりの歯は、仙右衛門が作った当時の面  
 影を、今も残しています。

この堤防の完成により、それまで干潟だった高江は、  
 千四百石もの米が穫れる豊かな水田地帯、「高江新田」  
 に生まれ変わりました。

仙右衛門は、この堤防の完成後、生まれ故郷の日州倉  
 岡に戻り、一七 六年（宝永三年）に、八十八歳の生涯  
 を静かに終えています。

【袈裟姫伝説】

古くから、困難な土木工事には、人柱伝説がついてま  
 わります。この長崎堤防にも、当時の堤防工事の苦勞を



【堤防から見た高江新田】



【長崎堤防】

【横はぎ】  
横長の布をつないでいくこと。



【小野仙右衛門の碑】  
一九五三年（昭和二十八年）には、仙右衛門の偉業を称え、川内川の下流の丘に、石碑が建立された。

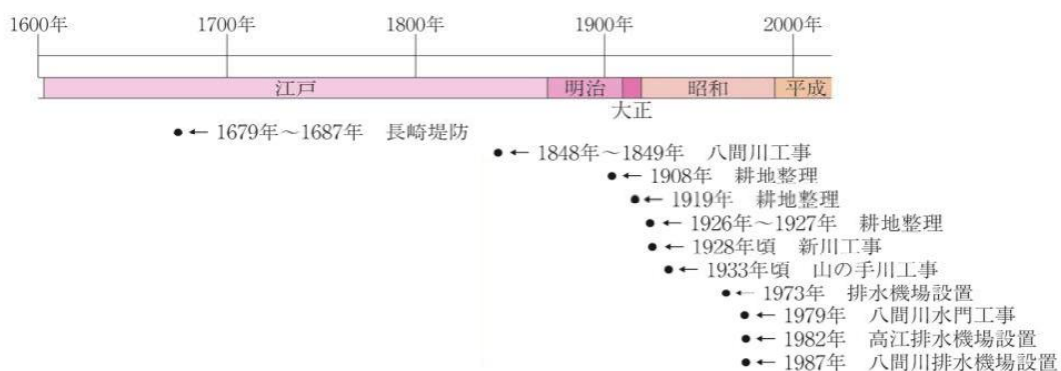
伝える「袈裟姫伝説」が、次のように語り継がれていきます。

ある夜、仙右衛門は「横はぎの着物を着た娘を人柱にたてよ。その流れのままにそって堤防を築け」と告げる不思議な夢を見ました。

翌朝、同じ夢を見た仙右衛門の娘の袈裟は、縦じまの着物にわざわざ横布をあてて繕った着物を着て、自ら川に身を投げてしまいます。

仙右衛門は嘆き悲しみながらも、夢にあったとおり、長い縄の流れにのせて、長崎の方から流してみました。縄は生命あるもののように、くねくねと七か所曲がりながら伸びていきました。

仙右衛門が、この縄の形のとおり石垣を築き、ようやく工事がうまくいきました。



【高江新田のその後の工事】